

2014年3月期 第2四半期決算説明会 質疑応答

2013年11月6日に開催した決算説明会における主な質疑応答は下記の通りです。なお、記載内容につきましては、ご理解いただきやすいよう一部に加筆・修正をしております。

Q1: ホスピタル事業では、国内で生産効率が上がらないなどの課題があるが、中期計画で想定している売上の伸びを達成できるのか？ 新たな対策はあるのか？

A1: ホスピタル事業は当社の柱となる事業の一つであると認識しており、売上成長率の改善だけではなく、収益率も底上げして行くことを考えている。ご指摘のような課題もあり、価格圧力も強くなってきているが、それでも説明会で紹介したような成長が期待できる重点製品が幾つか出てきている。これらの製品は、製造立上げは日本でいつつ、早期に海外に生産移転することで収益貢献させたいと考えている。また、今回発売することになった早期承認対象品のアセトアミノフェン注射液も製造承認を取得し、薬価収載を受けた。収益貢献には、まだ少し時間がかかるが、着実に業績を底上げすると考えている。

Q2: 中国では第1四半期にニューロ製品の在庫調整の問題があったと思うが、解消したのか？ また欧米企業中心にクリーンナップ運動が進められているが、事業に影響が出ているのか？

A2: 第1四半期は、ニューロ製品の在庫調整の影響を受けて中国事業の売上は4%伸長であったが、第2四半期では売上伸長率が19%と改善している。また、外資系製薬企業の贈賄問題を受けて、製薬メーカーの販促活動には一部影響が出ているようであるが、医療機器業界にはそれほど影響は出ていない。当社にとって中国事業は、従来通りの成長期待があると考えている。

Q3: TCVS社の品質システム改善コストは、上期22億円の計画が27億円になったとの理解で良いか？ また、下期の改善投資のガイダンスは12億円に変更なしか？

A3: 上期の投資額については、ご指摘の通りである。なお、下期は13億円程度の投資を見込んでおり、当初計画通り今年度末に完了する予定である。

Q4: 通期の業績予想を変更しない場合、単純計算すると下期は前期比6割弱の増益となるが、対上期での増益要因にはどのようなものがあるのか？

A4: 単純に上期と下期の利益額を比較すると約90億円の増益が必要になる。上期からの増益要因としては、TCVS社の品質システム改善投資とDH2開発費などの減少分で約20億円強の増益を見込んでいる。残り70億円は、売上拡大に伴う増益や生産性の改善などが寄与すると考えている。売上拡大については、心臓血管領域が中心となり、特に

アクセス製品とニューロ製品の増売を見込んでいる。また、ホスピタルではスマートポンプや既存品での拡大、血液システムでは治療用アフェレーシスや血液自動製剤システムなどでの拡大を見込んでいる。

Q5: 上期は為替の追い風にも関わらず、中国でのニューロ製品の在庫問題など想定外のマイナス要因があった。下期の為替見通しを変えないということは、新たなコスト増の要因があるということなのか？ それとも通期での上振れ要素があるのか？

A5: ご指摘の通り、上期には想定外のマイナス要因もあったが、これらは特に第1四半期に影響を及ぼしており、第2四半期では挽回しつつある。確かに、上期業績は為替に助けられた面もあるが、下期に新たなコスト増を引き起こすような問題は現時点では想定していない。通期業績の上振れについては、実現すると良いが、まずは期首計画を着実に進めていきたい。

Q6: 下期にローンチ予定の新製品うち、「欧州の膝下バルーン」と「閉鎖式輸液ライン」のピーク売上高はどの程度か？ また、閉鎖式輸液ラインの競合と比較した優位性は？

A6: 閉鎖式輸液ラインは、下期中での大きな収益貢献は見込んでいない。将来的には、既存製品の置き換えになると考えている。製品特徴としては、プラグ部分の液残りが少ないことがある。膝下のバルーンも、下期中での大きな貢献は見込んでいない。

Q7: 「日本でFFRが普及していない理由は、PCI件数自体が減少しているから」との解釈もあるようだが、どのように見ているか？

A7: 日本でもステント植込み本数をコントロールする動きがあることは認識しているが、高齢化が進みステントを必要とする患者さんは増えてくると考えている。また技術が進歩すると、FFRを使わなくてもドプラ血流計などで新しい患者さんが発見されることもあるため、日本ではPCI件数が欧米ほど急激に減少することはないと考えている。

Q8: 上期は苦しい中で為替に助けられたが、下期もその状況は変わらないのか？

A8: 上期はご指摘の通り為替効果に助けられた面もある。下期は為替想定を変更しないので、実質的に下方修正という見方もあるが、為替は予測できないところもあるため、まずは期首計画の達成を目指したい。

Q9: 血液システム事業の環境変化は、BCT買収時に織り込んでいた変化か？

A9: 欧米での血液市場の変化は、日本においても既に5年ほど前に起こっていたため、想定範囲内の動きだと考えている。このような環境変化を前提に、赤血球よりも血小板に軸足を置いた企業を買収した。

Q10：シリコンバレーでのベンチャー投資など、外部から新しい技術を導入するケースが増えているが、どのような技術開発の姿を目指しているのか？

A10：当社は、これまで幾つかの事業や技術の買収を行ってきており、これからも継続的に実施して行く計画であるが、買収において重要なのは買収後の価値向上であると考えている。これが持続的成長につながる。技術は外部から導入しても良いが、当社の技術者が自ら価値向上できるように進めたいと考えている。

Q11：生産性の改善効果は第3四半期、第4四半期も見込めるのか？

A11：下期以降も改善傾向は継続すると考えている。

Q12：粗利への為替影響の比率が小さいように見えるが、海外生産比率が上がっていることが要因か？ また、海外生産比率の目標はどの程度か？

A12：ご指摘の通り、海外生産比率の増加が貢献している。上期の海外生産比率は43.2%であり、増加傾向は下期も続くと見込んでいる。

以上